

# 学生団体の被災地支援活動からの学び —レイテ島漁村の自立支援を目指して—

小早川 裕子\*

## はじめに

東洋大学国際地域学部国際地域学科（以下、RDS: Regional Development Studies）は、国内外の地域が抱える諸問題を理解し、解消法を考え、地域開発に貢献する学科である。RDSの研究の主たる姿勢は「現場主義」であり、学生たちは現場へ赴き、自分の目で地域を見て人々と交わり合う中から問題の本質を見抜く力を養っている。RDSが提供する研修先の日本、アジア諸国、アフリカ、豪州、欧米諸国などで学生たちが現地の人々と関わりを深める中、近年、地球の気候変動の影響を受けて記録的な被害を受ける国が増えている。2011年3月11日の東日本大震災、2013年11月4日のフィリピンを襲ったスーパー台風ヨランダ、そして、2015年4月25日のネパール大地震はその代表である。RDSではこれら被災地の悲惨な様子を傍観することはできないと学生たちが主体的に取り組む活動を支援している。その一方で、どの支援活動も如何に持続性をもたらせ成果を挙げられるのかが課題となっている。

今回取り上げる事例は、語学研修、ゼミ研修、専門研修など異なる研修でフィリピンと関わってきた学生たちが2013年の台風で破壊的な被害を受けたレイテ島の人々の力になりたいと、自主的に結束した学生団体の活動である。被災してから2年を迎えようとする現在、彼らは今後の支援方法を改めて考える時期に差し掛かっている。本稿では、学生支援団体の結成から今日までの活動内容を説明し、縮小する支援・協力者と増大する現地のニーズに対応しきれないジレンマの中で学生たちが諦めずに新しい対応策を編み出していく過程を考察している。

筆者は本学生団体の顧問として、彼らの活動に結成当時から携わっている。

## スーパー台風と学生団体結成まで

RDSでは2006年以降、毎年春季と夏季の長期休暇期間にセブ市で語学研修に参加する学生、ワークショップに取り組む学生、あるいは、ゼミ研修やボランティア団体のメンバーとして活動する学生たちを何人も送り出している。セブに魅了されてリピーターになる学生も少なくない。そのような学生たちは、フィリピン人と友達になって帰国後もFacebookなどでコミュニケーションを続けている。

---

\* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

2013年は30個もの台風がフィリピンを襲った。特に11月のスーパー台風ヨランダ（平成25年台風第30号）による被害は最大で、当時フィリピン政府は台風の進路にあった住宅や建物の70-80パーセントが破壊し、死者は1万人（最終死者数6201人：フィリピン国家災害リスク削減管理委員会）に達すると報道した。ヨランダは竜巻や高潮を形成し、鉄柱を捻じ曲げ、大型船を陸に放り投げ、民家や建造物をなぎ倒していった。次々に報道されるフィリピンの悲惨な状況をRDSの学部生たちは他人事ではないと黙っていられなくなった。世話になったフィリピン人に自分たちができることは何か。その答えを出す間もなく、まずは義援金を集める目的で2013年11月に学生支援団体を結成した。団体はオリエンタル・スカイ・プロジェクト（以下、OSP）と名付けられた。

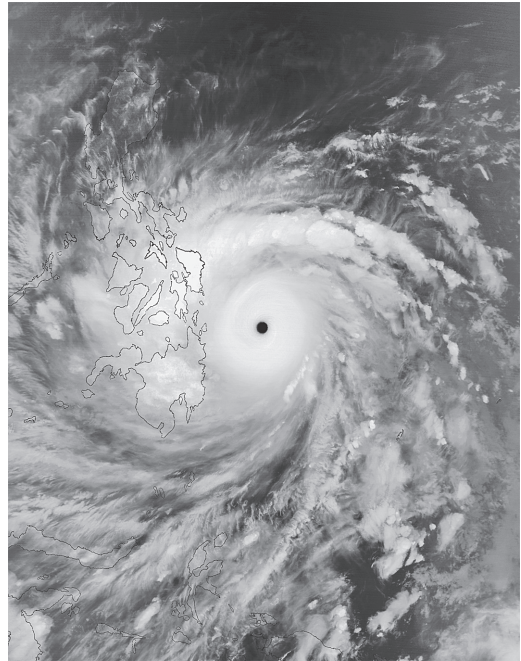


写真1 NASA 2015 Nov. 8

## チャリティー・イベントに見る変化

### (1) OSP 結成直後

OSPは12名ほどの学生で発動した。発動直後に議論したことは、義援金をどのように集め、それをどこへどのように渡すかについてだった。会議に参加したメンバーで合意したことは、支援する地域が復興し自立して生活できる目処がつくまでの、およそ3年間は続けるということだった。支援を続けていくためには、協力者を増やしていく必要があるが、その手段の一つとして、OSPの協力者に活動内容を広く知らしめ、寄せられる義援金の使い道を提示しアカウントビリティを明確にすることが提案された。そこで、FacebookにOSPの公式サイトを開設し、活動を紹介しながら協力者を募ると共に意見や情報を得ることにした。2013年の最高アクセス数は6千を超えた（2014年の最高は1310件、10月現在の2015年では561件）。Facebookは現在もOSPの広報ツールとして重要な機能をしている。最近では、フィリピン人にもOSPの活動を理解してもらうために、英語でも掲載している。長期に支援すること、また、アカウントビリティを明確にすることが決定されたことで、義援金を外部の大手援助機関へ委託して支援する選択肢は無くなった。OSPメンバーが開催するイベントから直近の春季休暇期間にレイテ島へ行き、支援地域を直接探り出すことにした。

OSPの結成後はほぼ毎日会議を開き、義援金をどのように集めるかについて協議した。そこに外部からの協力団体、NPO法人のUbdobe、Class for Everyone、そして、JPマネジメントが加わった。いずれも若手起業家でユニークな発想の元、独自の方法で社会貢献をしている。Ubdobeは音楽・アート・医療福祉を融合させたプロジェクトを通じて、あらゆる人々の積極的社会参加を推進する団体である。Class for Everyoneは日本で使われなくなったパソコンを個人や企業などが

ら集め、途上国の貧困層にこれらを活用した教育・就業機会を創出している。一方、JP マネジメントは、幅広い起業家ネットワークを生かして起業家セミナーなどを開催している。これら3者の参加は、レイテ島の被災者を支援したいと考えている社会人や他大学生など、背景を異にする多くの人々をOSPが企画するイベントに巻き込んでいくこととなった。

## (2) 第1回チャリティー・イベント

第1回「Save Leyte チャリティー・イベント」は、2013年12月5日に開催することが決定された。イベントは、OSP 東洋大生によるスーパー台風ヨランダの説明、カメラマンでスーパーヨランダから3日後には水と食料を詰めたサックを背負ってバイクでレイテ島を回って来た、中臺孝樹氏による被災直後のレイテ島の報告（写真2）、マルチタレントの今井洋介氏とUbdoobe 代表の岡勇樹氏による東北大震災



写真2 『Save Leyte チャリティー・イベント』

に関する対談、東洋大学とレイテ島タクロバンをスカイプで繋げた生中継報告を盛り込んだ。東洋大学国際地域学部の松丸亮教授は、ヨランダによる高潮の被害状況を複数の大学で研究する「2013年フィリピン高潮合同調査隊」のメンバーとして、イベントが開催される日にタクロバンで調査することになっていた。そこで、イベントに集まってくる人々に被災現場の状況を伝えて欲しいと事前をお願いした。タクロバンの調査隊にはNHKが同行することが縁となって、東洋大学のチャリティー・イベントも取材を受けることになった。イベントの様子は翌朝のNHK首都圏ニュースで紹介された。他にイベントを盛り上げたのは、東洋大学の軽音サークル「FFA」とダンスサークルの「ハニー」であった。また、イベントでは軽食や飲み物を出したが、何人もの学生がイベント開催中に裏方となって食器を洗ったり、片付けに勤しんでいたことも特記しておきたい。

チャリティー・イベントはイベントとしては大成功を取めた。その一方で反省すべき多くの点が後日の反省会で挙げられた。特に大学側から指摘された問題は、イベント会場の片付けが乱雑であったこと、また、イベントのダンス衣装の妥当性、バンド音楽に高揚し興奮気味の学生たちの存在である。その他運営上で行き届かなかった側面が多々あった。しかし、企画としては初めての試みであったにもかかわらず、メンバーが一致団結した総合プレイで参加者を驚かせるほどの楽しく知的刺激を与えるイベントになった。

終了してみると、イベント参加者は216人を数え、寄せられた義援金はほぼ100万円になった（図1）。義援金は、当日の入場料から得たものだけではない。一企業からは10万円が寄付された。大学側では、初めてのRDS学生が主体となった支援活動ということもあって、RDSが主催するイベントとして認められ、本来、学生が募金活動をキャンパス内で行うことは禁止されている中、RDS教務課の協力を得て大学内の各部会を回って職員に募金願いをすることが許された。東洋大学白山キャンパスの学長室や総務部を始め、教務部、人事部、図書部などの多くの職員が資金の援助をした。職員から募金の協力を得られたことが、高額な義援金につながった。また、1万円

## イベント開催日（参加費）

第1回：2013年12月5日（¥2,000）

第2回：2014年5月12日（¥500）

第3回：2014年10月30日（¥2,000）

イベント実数

回	義援金（¥）	参加者数（人）
第1回	995,113	216
第2回	220,300	191
第3回	116,000	49

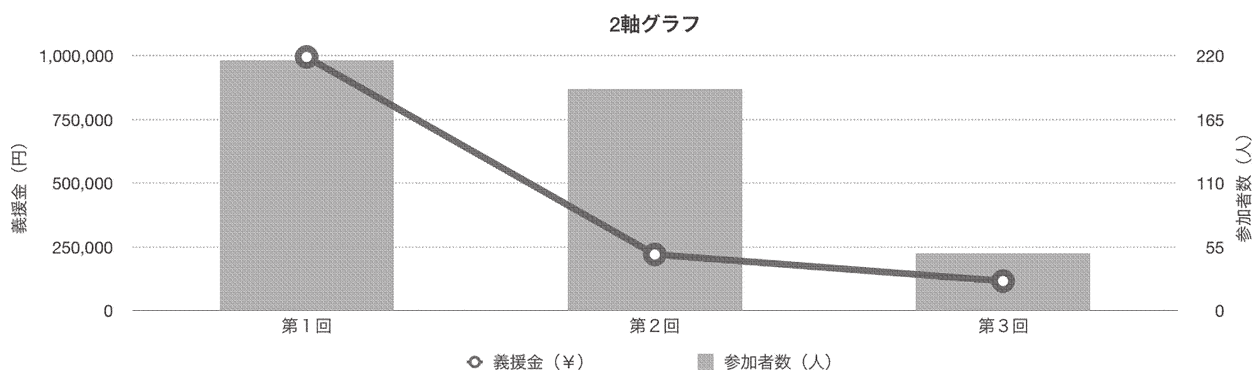


図1 イベントの義援金と参加者数の経緯

のプレミアムチケットを購入した教員や個人が何人もいた。OSPメンバーは、イベント後キャンパス内の各部会を再訪問し、集計結果の報告とお礼をすると同時に、プレミアムチケット購入者には後日感謝状を送った。

## (3) 第2回チャリティー・イベント

2014年5月12日に開催した2回目の「チャリティー・イベント報告会」（写真3）では、2月にレイテ島を一周して見てきた現場の現状報告と、支援地域の候補地域の説明を中心に行った。会議では報告だけでよいのでは、という意見もあったが、支援活動費を稼ぐ必要から、エンタテインメント性がなければ多くの学生を集めるのは無理だろうという結論に至った。そうして学生たちが呼びかけてボランティアで友情参加したのは、ガラス窓にカラフルな絵を描く「子ども顔負けに遊ぶアーティスト集団」NPOカラフルラブ、フィリピン民族舞踊団「インラヨグフィリピンズ」、フィリピン人歌手ジャズ・ラミレス氏、そして、軽音サークル「FFA」である。また、フィリピン大使館から公使がスーパー台風ヨランダの被害状況を映し出した写真を持参して参加した。



写真3 第2回「チャリティー・イベント報告会」

参加費については、より多くの学生に参加してもらいたいなどの理由から、学生にとって負担が少ない金額にすることになった。ワンコイン（¥500）の参加費である。低く設定した参加費が効いたのか、イベントには191人が集まった。しかし、この金額で軽食とソフトドリンクも出したた

め、参加者には大いに喜ばれはしたが、支援金として残ったのは10万円に満たなかった。一企業から10万円の寄付と教員からの支援金が寄せられたことで最終的には22万円となった。職員への呼びかけを教務課にお願いしたが、今回は遠慮して欲しいとの返事を受け、2回目のイベントからは職員に向けた支援願いは断念した。

#### (4) 第3回チャリティー・イベント

3回目の「チャリティー・ハロウィン」は、2014年10月30日に行った。時期的にハロウィンと言うこともあって、皆んなでハロウィンの仮装をしてイベントを盛り上げることにした。出し物も本学のマジックサークルによるパフォーマンスを新たに加え、ジャズ・ラミレス氏の歌とFFAのライブ音楽で会場の雰囲気作りをお願いした。また、仮装した参加者からベストドレッサーを投票選出するなどの演出も行った。参加費は初回時と同様の2千円を徴収することにした。前回は500円と安すぎたため、参加者数が多かったにもかかわらず支援金としてはあまり集められなかったこと、また、OSPは被災者を支援する活動をしているのであって、学生たちを楽しませるだけのイベントを運営しているわけではないとの反省や意見から、学生にとって安くはない参加費を取る分、次回も来たいと思うような楽しい仕掛けやエンタテイメント性を組み込むことが大切だ、という考えに至った。

エンタテイメント性をもたせつつ3回目のチャリティー・イベントでも、8月－9月の夏季休暇期間の活動報告と今後の活動予定発表に重点を置いた。活動報告では支援対象地域と支援方法を決定するまでの経緯を説明した。しかし、10月30日はイベント開催者にとって不運な日となった。大学内のイベントが3つも重なってしまったのである。結果、学生たちは思い思いのイベント

表1 各イベントの実施内容比較表

	第1回 (2013年12月5日)	第2回 (2014年5月12日)	第3回 (2014年10月30日)
テーマ	『Save Leyteチャリティー・イベント』	『チャリティー・イベント報告会』	『チャリティー・ハロウィン』
場所	東洋大学内「スカイホール」	東洋大学内「スカイホール」	東洋大学内「スカイホール」
参加費	¥2,000	¥500	¥2,000
イベント内容	・スーパー台風ヨランダとは (学生)	・フィリピン大使館より公使より感謝の挨拶	・支援方法報告と支援地状況説明
	・レイテ島現状報告 (カメラマン、中臺孝樹氏)	・学生による現地報告 (レイテの現状と支援先決定報告)	・ハロウィン衣装コンテスト
	・東北大地震の経験 (タレント・写真家、今井洋介氏)	・ライブイベント (NPOカラフルラブ)	・歌 (Mr. Jazz Ramirez)
	・オン・ライン現地報告 (松丸亮教授、現地NGOゴ氏)	・フィリピン民族舞踊	・ライブ音楽(FFA)
	・東洋大学ダンスサークル「ハニー」	・歌 (Mr. Jazz Ramirez)	・マジックパフォーマンス
	・東洋大学音楽サークル「FFA」	・ライブ音楽 (FFA)	
	・NHKニュース番組で放送		
外部協力団体	・NPO法人Ubdobe	・NPO法人Ubdobe	・東洋大学サークルFFA
	・JBマネジメント	・JBマネジメント	・東洋大学マジックサークル
	・NPO法人Class for Everyone	・NPO法人カラフルラブ	
	・東洋大学サークルFFA	・インラヨグフィリピンズ	
	・東洋大学サークルハニー	・フィリピン大使館	
	・NGO GawadKalinga Cebu	・東洋大学サークルFFA	

に分散し、集客率が大幅に減少した。49名である。ここまで参加者数が落ち込んだのは、複数のイベントが重なったこともあるが、第一要因は、やはり、参加費を値上げしたことにあると考えられる。また、台風被害を受けてから1年が経とうとする時期でもあり、支援熱が冷めてきたことも要因となっていることは否めないだろう。各イベントの参加者数と義援金額の変化を図1に示した。集計金額が第2回から下がり続け、参加者数は第3回で大幅に下がった事が明確になっている。各イベントの実施内容は表1にまとめた。

## チャリティー・イベント開催からの学び

今後、学生が災害を受けた地域を自主的に支援を行う場合、大学ないし学部が募金・支援活動を認可し、その活動が教育的学びにつながるような仕組みを考えていく必要がある。被災地の役に立ちたいと思う学生の主体的活動は、教育的にも社会的にも大きな意義がある。また、そのような学生たちの気持ちを受け止め応援する教職員の存在が学生たちに勇気と自信を与えることは、第1回のチャリティー・イベントで見て取れた。アカデミックな要素とエンタテインメントの要素を組み合わせ合わせた200人以上を集めたチャリティー・イベントを成功裡に終えたことは、OSPメンバーにとって大きな自信と学びとなった。しかし、それはRDSがOSPのチャリティー・イベントを学部の活動として認定したことで可能となった。各部会に所属する職員や一般学生を対象とした募金活動は、通常、学長を筆頭にトップダウンの通達がない限り許されない。トップダウン型の支援活動では学生たちの創意工夫を発揮した支援活動を引き出せず、募金箱を持って立つことが精々である。OSPのチャリティー・イベントは特例であった。そして、OSPの特例は特例として終了し、定例化するには至らなかったことは残念である。

第1回の多くの理解者・応援者に支えられた学生の意欲と責任感は、理解者・応援者の減少に比例して銷沈していった。また、第1回のイベントは12月に行ったが、第2回のイベントは5月であり、その間に4年生は卒業し新1年生が入ってきた。図1が示すように、第1回と第2回の参加者数に大差がないが、第3回では大幅に減少している。新1年生にとっては、大学に入学して初めての学生主催ビッグイベントに興味を持って参加したことであろう。参加費も500円と財布にやさしい金額であった。しかし、第3回目では参加費が4倍に跳ね上がり、多くの賛同者を失う結果となった。参加者の大幅な減少はOSPメンバーが立ち直れないほどの衝撃となり、多くの労力、能力、気力、時間を消費するチャリティー・イベントの開催は不可能となった。チャリティー・イベ



写真4 プノン村



写真5 プノン村の漁民



写真6 プノン村の住宅

ントを開催する場合は、当然のことながらイベント内容、経費、達成目標資金などの設定には細心の注意を払い熟考のうえ決めなければ本末転倒の結果となる。

## OSP 支援地域、レイテ島プノン村

OSP が定めた支援先は、ヒロングス地方マタラン市にあるプノン村である（写真4、5）。衰退するイベントに失意する中、OSP が現在も存続しているのは、春季・夏季休暇の年2回、支援先のプノン村を訪れる学生が途絶えないからである。ジャングルの中にひっそりと存在するプノン村にはホームステイできるような家がないため、学生たちは近郊の宿泊施設から通っている。プノン村には60世帯が住んでいる。その内、10世帯はコミュニティ組織の形成から住宅建設の支援を行っているNGO ガワッドカリंगा（GK: Gawad Kalinga）の支援で建てられたブロックセメントの住宅であるが、残りの50世帯は資金不足のため、バナナやヤシの木で作られた伝統的な住宅で生活している。湿地の上に建てられた住宅は高床式で満潮時にはそばを流れる川の水が床下を埋めることになる（写真6）。

プノン村は主に漁業で生計が立てられている。写真7にあるように彼らが所有する船は、一人ないし二人乗りの手漕ぎのものである。バンカと呼ばれる竹製のこの船で村に流れる川を上って外海に出る。外海までの所要時間は波や天候によって異なるがおよそ20分である。そこからさらに魚がいるスポットを探し、漁が始まる。彼らの魚釣りの道具は一本の釣り糸と針のみである。釣竿があるわけでも網があるわけでもない。彼らが捕える魚は必然的に小さなものとなる。大きくても精々手のひらサイズである。そんな魚を1日かけてバケツ1杯とって100ペソから200ペソ（約300円から600円）である。そこから漁の必要経費、例えばバンカのレンタル料や糸、餌代、維持費などを差し引いたものを2世帯で折半する。各家庭には大家族も同居しており、平均すると1世帯は5-6人で構成されている。村民の中には厳しい生計に役立てようとキャンドルを作ったり、機織りをする者もいる。いずれにせよ、現金収入に乏しいプノン村の生活は非常に厳しい。

平穏な日は楽園かと思うほど自然の恵みの豊かさに恩恵を受けるが、一度台風が来ると自然は牙をむいて村を襲う。船も家も一掃されてしまう。このような状況を受けてGKが協力し、10世帯分の住宅を建てた。その後、住宅建設費は底が付き残り50世帯分の建設費を支援するスポンサーを探している矢先に台風バシヤンが村を襲った（図3）。図2の地図はGKが描いた新築住宅建設計画であるが、台風バシヤン時に図2上の矢印が示す方向で外洋からの高波が川を伝わって村を飲



写真7 村のバンカボート

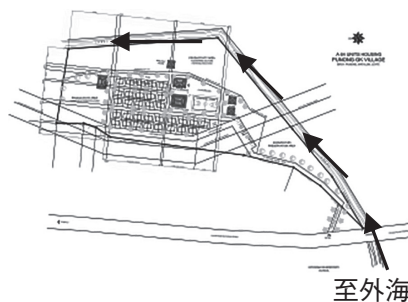


図2 プノン村の地図

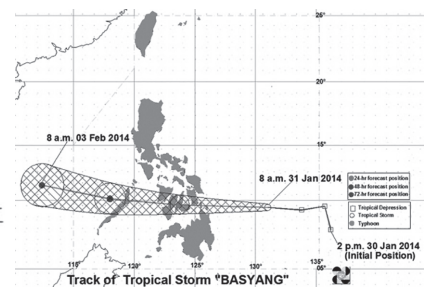


図3 台風バシヤンの進路

み込んでいった。台風バシヤンがプノン村に上陸したのは真夜中で、暗闇の中、台風の威力を目視することもできないまま、村民は恐怖の中一夜を過ごした。翌朝、日が昇ると GK が建てた住宅以外の伝統的な住宅は全壊・半壊を含め多大な損害を受けていた。彼らの生活の糧であるバンカポートも流され損壊した。

## 現地支援活動の変遷

### (1) 第1回レイテ島訪問 (2014年2月)

2014年2月にレイテ島を訪れた OSP は、最も打撃が大きいとされたタクロバン、パロ、オルモック地域を中心に島を車で1周した。大型船が住宅を押しつぶし陸揚げされたシーンや空港の屋根や壁が吹き飛ばされほとんど機能していない様子は、さながら東日本大震災の直後を思い起こすものだった。しかし、タクロバンには既に世界各国から大規模支援団体が活動しており、OSP のような小さな団体が入り込めるような場はなかった。また、大津波が街全体を一掃したパロも被災規模が大き過ぎて OSP の手に負えるものではなかった。

OSP としては、台風で被災したにもかかわらず援助の手が回っていない地域を支援したいと考えていた。そこに、レイテ島出身のセブ市の活動パートナーからスーパーヨランダ後の台風バシヤン (2014年1月31日に発生) に襲われた小さな漁村の存在を知らされた。スーパーヨランダのインパクトはあまりにも大きすぎたため、それを下回る威力の台風バシヤンによる被害は語られることも、ジャングルの中の小さな漁村の被害が報道されることもなかった。OSP はプノン村にこそ支援する意義があると決断した。

支援方法としては、デイケアセンター (託児所) を建設することにした。村民が最も求めていたのは破損した住宅か船の修繕であったが、船は NGO の GK が8隻寄付することになっていた。OSP が集めた100万円の予算では、村民全員に公平に住宅を提供することは叶わなかった。そこで村民、現地 NGO、RDS の教員とも話し合い、デイケアセンターを建設するのが良いのではないかということになった。センターには日中漁や仕事に出かける両親が安心して子供達を預けることができる。また、必要時には、村民の集会場や避難所として機能させることができる。

現地 NGO の紹介で、隣村のデイケアセンターを建設した建築家に会い、OSP の予算内でセンターの建設が可能なことを確認した上で、同様のものをデザインするように依頼した。その後は日本から現地 NGO と連絡を取り合いながら、建設を進めることとなった。

### (2) 第2回レイテ島訪問 (2014年8月)

第2回の訪問時までにはデイケアセンターは専門家の指導の元、プノン村の男性たちが建設し、内装を除いてほぼ完成していた。台風時の浸水を少しでも避けようと、床を10センチ高くする作業をしていたが、これにかなりのセメント代と時間がかかった。第2回イベントで集めた支援金は、センターの内外壁のペンキ、入り口及びトイレの扉、そして、窓ガラスの購入に充てた。ペンキ塗りは OSP メンバーと村の男性らと一緒にいった。丸二日かかって塗り終わったが、センターの後ろ側の壁はブロックを塗りつぶすセメントが足りなく、現在もそのままの状態にある。それでも



サーモンピンクとアップルグリーン色に塗られたセンターはセメントがむき出しだった状態とは打って変わり、温もりのある存在になった。室内の壁にはここから成長して欲しいという気持ちを込めてOSPメンバーと村の子供達の手形で木をなぞった絵を描いた(写真8)。



写真8 手の平の木

### (3) 第3回レイテ島訪問 (2015年2月)

この時までにはトイレが設置されていた。本来なら男子用と女子用に別々のトイレを取り付ける予定だったが、とりあえず、一つだけを取り付け、もう一つのトイレ用スペースは物置にしておくことにした。第3回の訪問時では、子供用椅子を30脚と4人掛け用デスクを4台揃えた。また、床には厚手のビニールシートが張られ、子供達が裸足で中に入れるようにした。

この頃になると、あとは細かな備品を揃えるだけとなり、デイケアセンターとして村民に開放するばかりとなった。デイケアセンターの目的は就学前の子供達を日中預かりながら、英語や算数の勉強に加え、歌や絵なども教えることにあった。そのためには、先生が必要である。問題は、どのように先生に毎月給料を支払うのかである。既述の通り、プノン村は現金収入に乏しい貧困地域である。折しも、この頃からイベントの雲行きが怪しくなってきた。OSPメンバーは少しずつビジネスを起業し利益を社会に還元するソーシャルビジネスに関心を持つようになり、村民が自力でデイケアセンターの先生へ給料を支払い、台風などの万が一に備えるための手立てを考え始めた。

以後、OSPはISR-ConnAction(以下、ISR)と団体名を改名し、ソーシャルビジネスを意識した支援活動のあり方を考えている。ISRとはIndividual Social Responsibilityの略で、「支援の規模やスタイルにこだわらず、困っている人を助けたいと思う個人をつなぎ社会的責任を果たしていくこと」を活動の理念とした。ConnActionとはconnectとactionからなる造語で、「行動を起こすことで人々を繋げ、より良い社会の形成を実践していく」基本的姿勢を表している。ConnActionは元々セブ市で都市貧困層地域で活動するグループであったが、コアメンバーと理念が同じことから両団体を合併することにした。

### (4) 第4回レイテ島訪問 (2015年8月)

ISRと改名してから初めてのレイテ島訪問でプノン村に用意したのは、第1に室内照明の取り付けであった。照明がないと夕刻6時になると読み書きは困難になり、利用することができなくなるが、照明が取り付けられたことによりデイケアセンターは日中の就学前の子供たちだけではなく、学校を終えて帰宅した中高生にも利用できるようになった。第2にホワイトボードである。年齢別、目的別に利用できるように2枚を用意したいと考えていた。そして、第3に本棚である。ISRはレイテ島を訪れるたびに、文房具や英語の絵本などを持参しているが、これらを整理して置ける棚は必需品であった。



写真9 収集した古着

写真10 古着の整理

写真11 ガレージセール

写真12 ガレージセール

表2 レイテ島訪問と支援内容

	2014年春季	2014年夏季	2015年春季	2015年夏季
参加人数	12人	15人	9人	8人
支援金	100万円	22万円	11万6千円	2万円
支援内容	デイケア建設	デイケアセンター内外壁のペンキ塗り	子供用椅子 30脚	室内電気接続工事
		窓ガラス	子供用デスク 4つ	ホワイトボード2枚
		入り口用扉	床シート	本棚
		トイレ用扉 2枚		

ISRメンバーがこれらを揃えるために考え出した方策は、セブ市で古着のガレージセールをすることだった。仲間に声がけをしたところ集められた古着はいくつもの山となった。ISRメンバーとしてフィリピンへ行くことになっている学生は8人いたが、集まった古着を全部運ぶにはとても人手が足りなかった(写真9、10)。そこで、語学研修でセブへ行く学生たちに古着を運ぶ手伝いをお願いすることにした。語学研修生の中にもISRメンバーがいたこともあって、学生たちは快く引き受けてくれた。また、彼らの中で希望する者にはガレージセールにも参加してもらった。英語で値段交渉をする非常に度胸が試される機会ではあったが、このユニークな経験をどの学生たちも楽しんでいった(写真11、12)。ガレージセールの売り上げは約2万円となった。上記購入品を買い揃える資金をなんとか稼ぐことができた。

表2に、これまで4回レイテ島を訪問した内容をまとめた。

## 課題と今後の展望

プノン村はこの2年間でスーパー台風ヨランダによる被害からほぼ立ち直った。それは、フィリピンのコミュニティ開発NGOであるGKが彼らの生活の糧である船を寄付したところが多い。損壊した住宅は自力で伝統的な住宅を再建した。村民の生活はすっかり元に戻ったように伺える。だが、1点だけ変化したことがある。それは、デイケアセンターの存在である。貧しいプノン村にこれまでデイケアセンターが建てられたことはなかった。村民も初めはデイケアセンターの建設を大いに喜んだが、そこで働く先生へ毎月給料を支払うという新たな課題が出てきた。ギリギリの生

活している村民が、例えばお米を買う分を先生への給料支払いに回すとは考えられない。その他、村民にとっての価値優先順位が、外部者である ISR のものとはかなり違うことが見えてきた。

今年（2015年）の夏、ISR メンバーがダイケアセンターに2週間単独滞在したが、この学生が指摘する私たちと村民との価値感の違いは、第1に、教育に関してである。プノン村では英語で会話できる者はいない。ISR メンバーと英語で話し合える存在は、ボランティアでダイケアセンターの先生を志願してくれたジェシカのみである（写真14）。このことは、村民のほとんどがまともな学校教育を受けていないことを物語っている。そして、プノン村の人々にとって最も必要な能力は漁の技術であり、自然との共存の知識である。学校で学ぶ英語や算数を始めとする科目は彼らの生活の即戦力にはならないのかもしれない。従来 of 生活を取り戻した村民の目に美しくペンキ塗られた教育目的のダイケアセンターは、どのように映っているのだろうか。第2に、暴力の問題である。親は子に言うことを聞かせるために、言葉よりも先に暴力で言うことを聞かせる傾向が高い。そのような親からの暴力は、子供間にも継承されている。第3に、環境問題である。ジャングルの中の自然に囲まれた環境下でもプラスチックは山積する。彼らはゴミを辺りに捨てる。彼らに恵みをもたらす川にさえ、彼らは汚物や調理に使用した油や生活排水を躊躇なく流し入れている。その病原菌が溢れた川で子供たちは毎日のように泳いで遊んでいる。第4に、貧困コミュニティに存在すると私たちが想定しがちな協働・協調性・互酬性の貧弱さである。家族内、また、コミュニティ内では、自分の生活が精一杯で周囲の人々の問題にまで関与するゆとりがないようだ。大工として生計を立てている村長はダイケアセンターの建設では先導を切って働いていたが、村の男たちの中には傍観している者が少なくなかった。

ISR のプノン村支援は残すところ1年である。プノン村に単独滞在した学生が指摘したように、村には課題が山積している。期間内に ISR は建てたダイケアセンターを通してどこまで村民の生活改善に貢献できるのだろうか。今、ISR はソーシャルビジネスに答えを見出そうと考えている。ビジネス経験や知識のない団体が起業することは容易ではない。ISR には RDS の1部2部生のみならず、文化部生や国際経済学部生、さらには他大学生、社会人を含む27人がメンバーとなっている。果たして、ISR の今後はどうなるのか。それは ISR メンバーもわからない。少なくとも明確なことは、ISR メンバーは諦めていないことだ。ISR は助言や支援をしてくれる新たな起業家ネットワークを構築しながら、ISR 自体を進化させつつプノン村の容易ではない諸問題に挑戦しようとしている。台風被害支援から始まった ISR の活動は、どうやら、それ以前から存在するプノン村の難しい課題に挑もうとしているようだ。



写真13 ダイケアセンター前



写真14 先生と子供達



写真15 ダイケアセンターの中

## [注]

1. 写真1：NASAによる撮影（2013年11月）
2. 写真2 - 15：筆者撮影（2015年8月）

## [参考文献]

ROLAND BÉNABOU and JEAN TIROLE, "Individual and Corporate Social Responsibility", *Economica*, Volume 77, Issue 305, pages 1-19, January 2010

## Students Oriented Group Activities on a Typhoon-Stricken Area: Aiming at Self-Support of a Fishermen's Village on Leyte Island

Yuko KOBAYAKAWA

This paper reports on the students oriented group activities in a fishermen's village on Leyte Island hit by Super Typhoon Yolanda in November, 2013. Chapter one describes the processes and challenges the group had faced through three charity events they conducted. Chapter two describes what they had learned in the village. Chapter three is about issues the group faces today and their future intentions.

**Keywords** : Students oriented group activities, Super Typhoon Yolanda, Leyte Island